

輸入感染症のゲートウェイとしての役割を果たす

海外からの帰国後の体調悪化では、インフルエンザ等の一般的な原因と、マラリアやデング熱といった輸入感染症双方が考えられます。原則的には、近隣のクリニック等でインフルエンザなどの一般的な感染症の評価後に外来を予約していただくようお願いいたします。発熱及び皮疹を認める場合には緊急入院となるケースがほとんどであり、より早期のご紹介をお願い致します。中には熱帯熱マラリアなど生命の危機的

状態となる疾患もあり、救命救急科とともに治療を行うこともあります。

当院はマラリアやデング熱などの輸入感染症の地域のゲートウェイとしての役割を果たしています。未承認薬など特殊な治療や特殊な検査が必要な場合や、当院で取り扱いが不可能な一部の渡航前のワクチンや予防薬についても対応可能な施設へご紹介いたします。

差別や偏見をなくすための診療デザイン

医療・介護においても感染症の知識や認識にはギャップがあり、中には未だに「HIV＝死」との認識を持つ方もおられます。当院では適切な感染対策のもと、HIVを含む感染症の患者さんが分け隔てなく医療を受けられるためのデザインとしてスタッフ教育・地域医療機関への指導を行っております。

現在、八王子エリアでの感染症(HIVや新型コロナウイルス感染症など)の受け入れ、効率的な患者さんのフローが維持できているのは、地域の先生方の強い責任感とノーマライゼーションの理解が根底にあるものと考えております。



感染症科 診療科長
平井 由児

- 日本内科学会 総合内科専門医/研修指導医
- 日本感染症学会 評議員/指導医/専門医/認定インフェクションコントロールドクター
- 日本化学療法学会 評議会/抗菌化学療法指導医
- 日本エイズ学会 指導医
- 日本環境感染学会
- 日本臨床微生物学会
- 米国感染症学会会員
- 米国内科学会会員
- 欧州微生物感染症学会会員
- 国際エイズ学会会員



感染症科
石橋 令臣

- 日本内科学会専門医/臨床指導医
- 日本感染症学会専門医/認定インフェクションコントロールドクター
- 日本呼吸器学会専門医
- 日本化学療法学会抗菌化学療法指導医
- 日本結核・非結核性抗酸菌学会指導医
- 日本アレルギー学会専門医

感染症科 診療科長

平井 由児
YUJI HIRAI

[専門領域]
HIV診療/性感染症診療/
感染症コンサルテーション/感染対策

東京医科大学八王子医療センター
TOKYO MEDICAL UNIVERSITY HACHIOJI MEDICAL CENTER
〒193-0998 東京都八王子市館町1163番地 Tel.042-665-5611

感染症科
紹介ページ



当院へのご相談・ご要望は、
お気軽にお問い合わせください



感染症の予防・治療・教育、差別や偏見のない、
安心して住み続けられる地域と医療体制をつくる



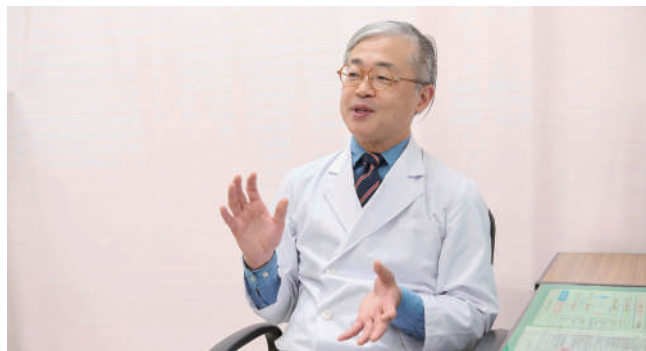
感染症科のご紹介

八王子エリアは地域全体でCOVID-19感染症患者の受け入れを行い、地域の医療機関や医師会のご協力のもと地域の中で安心して暮らせる医療体制を全国に先駆けて構築して参りました。八王子医療センターの感染症科では、入院中の患者さんに発生する様々な感染症に対する診断、治療をサポートする感染症コンサルテーションを中心に、地域の医療機関と連携し、適切な診断・治療、再発予防、そして社会復帰のサポートまで、感染症診療のトータルマネジメントを行っています。

血液内科医から感染症の専門領域へ

私のキャリアは血液内科医として始まりました。当時、白血病や悪性リンパ腫の抗がん剤による治療や造血幹細胞移植に携わる中で、いかに感染症診療が重要であるかを体感し、感染症に興味を持ちました。感染症がその人の生命を左右することは多々あり、感染症によって残念な結果になる人々を少しでも減らしたい、そんな想いから本格的に感染症科医としてのキャリアが始まりました。既に医師になって8年目を過ぎていましたが、それまでに培った血液内科医、市中病院勤務により得た、総合内科医としての経験が今でも活かしています。

医療は医師ひとりだけで完結できません。それまでの臨床経験に加え、心臓血管外科や移植外科、耳鼻科、精神科といった様々な専門領域の医師、薬剤師、検査技師、看護師といった職種との協力は、より質の高い、エビデンスに基づいた医療の提供に繋がっています。



地域の医療機関と連携し、複数のセーフティネットを持つ診療体制

当院では、入院患者さんを対象に各診療科より感染症のコンサルテーションを頂いております。診療科に関わらず、全ての入院患者さんの発熱の原因検索、感染症の診断・治療

を、感染症および内科専門医の視点でアドバイスを行っています。というのも、入院患者の発熱の原因の約半数は確かに感染症ですが、残り半分は非感染症です。つまり、「発

熱＝感染症」という思い込みは、重篤な合併症の見落としにも繋がりがねません。感染症、非感染症双方を考慮したアドバイスを提供することで診療のセーフティネットとしての役割を果たしています。

その一環として入院患者さんの微生物検査（主に血液培養）結果を院内で共有し、より適切な治療法や合併症の検索を迅速に提案しています。私たちへのコンサルテーションを含め常に複数の診療科の医師が関わり、複数の目が入ることで適切な診断・治療を提供できる体制が病院全体で構築されています。

新型コロナウイルス感染症の診療においては地域の医療機関の先生方のご尽力により、軽症例はクリニックや市中の医療機関、中等症・重症例は当院で診療するといった診

梅毒急増、専門機関が行うべき責任

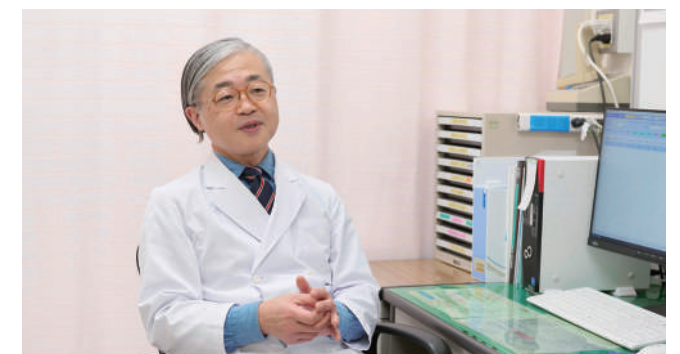
昨今、梅毒の患者さんが急増しています。梅毒は失明や脱毛、人格変化、全身の麻痺、血管が侵され様々な合併症が長期間に出現する可能性があります。さらに感染に気付かないまま出産することでお子さんに様々な障害を遺します。早期の適切な診断と治療を行うことでこれらの危険性を回避することができます。梅毒はこれまでに4週間の内服治療が行われておりましたが、現在は国内でも世界標準の注射剤による治療が可能となりました。当科でも注射剤による治療とともに梅毒の合併症の早期診断を積極的に行っています。さらに患者さんのバックグラウンドをお聞きした上で、HIVやB型肝炎など、他の性感染症の評価、ワクチン接種、よりリスクを低下させるための指導を提供しています。地域連携の一環として合併症のない安定した患者さんは紹介元医療機関にフォローアップを依頼することもあります。性感染症患者さんのご紹介の際には当院を受診する理由をご説明の上ご紹介ください。

腎移植手術の事前ワクチン接種

腎移植後に重篤な感染症に罹患した際には、それが原因となって、せっかく移植した腎臓を失うこともあります。当科ではそのような事態を可能な限り未然に防ぐ目的で、腎移植を予定されている患者へのワクチン接種を外来で行ってい

療のワークシェア、診療の分業体制がとられています。Web会議やセミナーを通し、地域の医療・介護・教育・行政とも新型コロナウイルス感染症の知識を地域の先生方と情報共有を持続していくことも重要な地域連携と考えています。

新型コロナウイルス感染症以外の感染症診療も同様に地域の医療機関と当院との分業・連携体制があります。当科の外来では、既に診断されたHIV患者さんのマネージメント、梅毒などの性感染症、輸入感染症の診療を、入院患者さんに限定し、感染症コンサルテーションを行っています。



全てのジェンダーやセクシャリティに対応し、プライバシーにも配慮した診療を行っています。性感染症は誰でも感染し得る病気であり、ある種インフルエンザや扁桃炎と同様です。とはいえそこにある性感染症の後ろめたいイメージが差別や医療機関への受診控えを生んでいることは事実であり、それらのイメージを払拭していくのは医師の役目だと考えます。

ます。腎移植後には接種できないワクチンもあり、移植前にワクチン接種計画を設定し、安全かつ効率的なワクチン接種を行っています。